



京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市上田上平野町字大塚509-3
センター長 山村則男

京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

Center for Ecological Research, Kyoto University
Kamitanakami Hiranochō, Otsu, Shiga, 520-2113, Japan
Home page : <http://ecology.kyoto-u.ac.jp>

— 目 次 —

京都大学生態学研究センター運営委員会（第31回） 議事要旨..... 1	研究会・実習・セミナー等の開催予定..... 4
京都大学生態学研究センター協議員会 （第41回）（第42回）議事要旨..... 1	公募研究会の報告..... 6
2002（平成14）年度センター活動予定..... 2	2002～03年度協力研究員リスト..... 7
公募実習受講生募集要項..... 3	Information 8
	編集後記..... 8

京都大学生態学研究センター 運営委員会（第三十一回）議事要旨

日 時：平成14年5月13日（月）10時～
場 所：京大会館215号室
出席者：運営委員22名、幹事1名

・議事に先立ち、新運営委員〔堀教授（京都大学理学研究科）、中原教授（京都大学地球環境学学）、山内助教授（京都大学生態学研究センター）〕、幹事の鴨嶋理学部等事務長の紹介があった。

報告事項：

- 1．平成14年度研究生2名、研修員3名、日本学術振興会特別研究員6名の受け入れ。
- 2．平成14年度非常勤研究員（COE）に継続者2名を採用。
- 3．平成14年度公募研究会、公募実習各3件を採択。
- 4．平成14・15年度の協力研究員を委嘱。
- 5．和田元センター長の本学名誉教授称号授与について報告。
- 6．21世紀COEのセンターにおける取り組みの現状と方針について報告。

議 題：

- 1．平成15年度概算要求について、各要求事項の概要説明が行われ、論議の後、了承された。
- 2．国立大学の独立法人化にむけての基本構想について、センターにおける取り組みの現状と基本方針についての説明があり、論議の後、了承された。

（文責：清水 勇）

京都大学生態学研究センター 協議員会（第四十一回）議事要旨

日 時：平成14年5月13日（月）13時30分～
場 所：京大会館217号室
出席者：協議員11名、幹事1名

・議事に先立ち、幹事の鴨嶋理学部等事務長の紹介があった。

報告事項：

- 1．平成14年度研究生2名、研修員3名、日本学術振興会特別研究員6名の受け入れ。
- 2．平成14年度非常勤研究員（COE）に継続者2名を採用。

3. 平成14年度公募研究会、公募実習各3件を採択。
4. 平成14・15年度の協力研究員を委嘱。
5. 和田元センター長の本学名誉教授称号授与について報告。
6. 21世紀COEのセンターにおける取り組みの現状と方針について報告。

議 題：

1. 平成15年度概算要求について、各要求事項の概要説明が行われ、論議の後、了承された。
2. 国立大学の独立法人化にむけての基本構想について、センターにおける取り組みの現状と基本方針についての説明があり、論議の後、了承された。

(文責：清水 勇)

京都大学生態学研究センター
協議員会（第四十二回）議事要旨
(書面による)

日 時：平成14年6月21日(金)

議 題：

1. 受託研究員1名の受け入れが承認された。

(文責：清水 勇)

2002(平成14)年度センター活動予定

生態学研究センターにおける2002年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、インターネット(<http://ecology.kyoto-u.ac.jp>)で公開しています。

1. 共同研究

2001年12月から始まった「植物の害虫に対する誘導防衛の制御機構」(代表者：高林純示)(科学技術振興事業団・戦略的基礎研究推進事業[CREST])などの共同研究が進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員(Guest Scientist)を公募する。

3. 公募研究会・公募実習

2002年度公募研究会・公募実習として、分野間の交流や若手研究者の育成の観点から、以下の6件が採択された。開催の日程などの詳細は、センターホームページに掲載する。

公募研究会

- 1)代表者：田中和博(京都府立大学大学院農学研究科)
「GIS(地理情報システム)による分布様式、行動様

式の解析」

開催予定日：2002年6月26日

開催予定場所：キャンパスプラザ京都

- 2)代表者：市岡孝朗(名古屋大学大学院生命農学研究科)
「生物間相互作用網の多様性促進機能」

開催予定日：2002年11月20日～21日

開催予定場所：生態学研究センター

- 3)代表者：永田 俊(京都大学生態学研究センター)
「生態系のデザイン方法論をめぐって」

開催予定日：2003年1月21日～22日

開催予定場所：生態学研究センター

公募実習

- 1)代表者：成田哲也(京都大学生態学研究センター)
「底生動物の分類生態実習」

開催予定日：2002年7月27日～8月1日

開催予定場所：信州大学山地下水環境教育研究センター

- 2)代表者：遊磨正秀(京都大学生態学研究センター)
「河川生態系の環境構造と生物群集に関する基礎実習」

開催予定日：2002年8月6日～13日

開催予定場所：京都大学理学部木曾生物学研究所

- 3)代表者：伊藤雅道(横浜国立大学大学院環境情報研究院)
「陸域土壌生態系における大型ミミズ類の生態調査法および種同定法の習得」

開催予定日：2002年8月19日～21日

開催予定場所：金沢大学理学部

4. セミナー及びシンポジウム

本年度開催される国内及び国際セミナーの予定は以下の通りである。

- 1) 第4回日英米「生物多様性と生態複合」ワークショップ
開催予定日：2002年7月9日～12日
開催予定地：北海道大学

5. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度（第三金曜日）センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する予定である。場所は京大生態学研究センターセミナー室（瀬田：会場への道順は、センターのホームページ参照）の予定である。

6. ニュースレターの発行

センター・ニュースは、印刷物として年に3回（7月、11月、3月）発行する予定である。また、センター・ニュースは、センターホームページでも公開し、最新の情報はホームページ上に掲載する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供したいと考えている。

7. 共同利用施設

大型分析機器：DNA関係ではDNAシーケンサー、全自動蛋白質一次構造分析装置、微量蛋白質精製分取装置、

蛍光分光光度計、液体クロマトグラフィー-アミノ酸分析計、自記分光光度計、超遠心機など、安定同位体関係ではガスクロ燃焼装置付質量分析計および水同位体比分析用自動前処理装置（MAT252）、元素分析計付質量分析計（コンフロ、delta S）が稼働している。

琵琶湖観測船：新造高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。

シンバイオトロン：テラトロン、ズートロン、アクアトロンからなるシンバイオトロンが運転されている。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林-1、-2、-3、林木群集実験植物園-1、-2、-3があり、種々の野外実験に使われている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に担当者に連絡してください。

DNAシーケンサー等関係：清水

安定同位体関係：杉本

観測船関係：永田

シンバイオトロン関係：川端

実験圃場林園関係：高林

8. 協議委員会、運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

2002年度（平成14年度）京大生態学研究センター 公募実習受講生募集要項

1. 実習課題

陸域土壌生態系における大型ミミズ類の生態調査法および種同定法の習得

2. 実習目的

大型ミミズ類は有機物の分解や土壌構造の物理性にきわめて大きな影響を与えていることが知られ、欧米ではこれまで生態研究、応用研究が数多く実施されてきた。わが国では主として分類研究の遅れが影響して生態研究はあまり多く行なわれてこなかったが、ここ数年分類学研究が飛躍的に進展し、正確な同定に基づいた生態研究も可能になってきたところである。しかし、外部形態では同定が困難なこと、種分類形質の変異の大きさなど生態研究を実施する上での種同定にもいくつかの問題があり、分類の知識と技術は欠かせない。本実習は大型ミミズ類を対象とした生態学ま

たは分類学的研究を実施しようとしている方を対象として、1) ミミズ類の基本的な分類体系を学び、2) 金沢大里山試験地および河北潟において野外採集法、生態調査法を体験し、3) 実験室においてミミズ標本の固定・解剖・同定法の基礎を習得することを目的に行なう。

3. 実施内容

実習は金沢大学理学部において行なう。第1日はミミズの形態、分類、系統、分布、生態などについての基礎的な講義を行ない、ミミズの分類と生態についての基礎知識を学んでもらう。第2日は金沢大周辺の野外においてミミズの野外採集法について実地での指導を行ない、午後は室内において採集したミミズの固定・保存・解剖についての実習を行なう。第3日は河北潟周辺においてミミズ類の調査法についての実習を行なう。

4. 担当教官

石塚小太郎（成蹊高校）、伊藤雅道（横浜国大・環境情報）、金子信博（横浜国大・環境情報）、鎌田直人（金沢大・理）、松本貞義（近畿大・農）、横畑泰志（富山大・教育）、Blakemore, R（杏林大・保健）、渡辺弘之（京都市）

5. 開催地

金沢大学理学部（石川県金沢市）

6. 実習期間

2002年8月19日（月）～8月21日（水）

7. 対象学生

学部3～4年生、大学院修士課程及び博士課程の大学院生

8. 受講定員

15名程度（応募者が多数の場合には、抽選により決定する）

9. 所要経費

受講費は不要。金沢大学までの往復運賃と、実習中の宿泊費は各自負担。宿泊場所については、伊藤雅道（横浜国大・環境情報 itotg@ynu.ac.jp）まで問い合わせられたい。

10. 単位

京都大学生態学研究センターとしては単位を発行しない。ただし、各学生の所属大学（または学部）において、他大学の実習をその大学（学部）の単位として認

める制度が存在する場合は、一単位相当の実習を受講した合格証を発行するので、受講学生各自が所属大学（学部）に本実習の単位を認めてもらう手続きをすること。

11. 受講条件

受講者は、「学生教育研究災害障害保険」等に必ず加入していること。

12. 受講申し込み

受講希望者は、ファックス又は葉書に所属・住所・氏名・電話番号を記入の上、「公募実習受講願」を京都大学生態学研究センター公募実習係へ請求して下さい。または、生態学研究センターホームページからも入手できます。

〒520-2113 滋賀県大津市上田上平野町字大塚509-3
京都大学生態学研究センター 公募実習係
TEL：077-549-8200、FAX：077-549-8201
Home page：http://ecology.kyoto-u.ac.jp/

13. 受講願送付および問い合わせ先

〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-7
横浜国立大学大学院環境情報研究院 伊藤雅道
TEL：045-339-4357、FAX：045-339-4379
E-mail：itotg@ynu.ac.jp
（封筒の表に「公募実習受講願在中」と朱書すること）

14. 申し込み期限

2002年7月31日（水）必着

シンポジウム・研究会・実習・セミナー等の開催予定

公募研究会

【生物間相互作用網の多様性促進機能】

開催予定日：2002年11月20日～21日

開催予定地：生態学研究センター

問い合わせ先：市岡孝朗（名古屋大学大学院生命農学研究所）
（E-mail：b51552b@cc.nagoya-u.ac.jp）

趣旨：生物群集の各構成種は、食う・食われる、寄生、競争、相利共生などといった多様な相互作用を他の生物との間にもちながら、それぞれの生存戦略を多様に進化させてきた。こうして長い進化史的な時間のなかで生物間相互作用は、生物多様性を増大させる原動力のひとつとなってきたが、限られた空間資源と物質資源のなかに成立している現時点での生物群集における

生物の多種共存を維持・促進する機構としても、軽視できないはたらきをもっている。陸域生態系には、植物の被食防衛をめぐる生物間相互作用が普遍的に存在しており、さらにそこから多様な生物間相互作用が派生している。それら複数の相互作用は、互いに直接・間接的な関わりをもって相互作用網を形成している。動物-植物間相互作用を出発点とするこのような相互作用網が生物多様性の維持促進機構として、どのような役割を果たしているのだろうか。研究会では、こうした問題解明のために今後どのような研究アプローチが有効で、どのような研究課題を設定すべきかといった点について、進化生態学、個体群生態学、群集生態学、生理生態学、化学生態学、数理生態学といった背景の異なるさまざまな研究分野の視点を交えて、議論を深める。

【生態系のデザイン方法論をめぐる】

開催予定日：2003年 1月21日～22日
 開催予定地：生態学研究センター
 問い合わせ先：永田 俊（生態学研究センター）
 （E-mail：nagata@ecology.kyoto-u.ac.jp）

趣旨：今年度より開催するヒューマンインパクトセミナーの成果をふまえ、生態系・生物多様性に対する人間影響評価および、生態学的な原理に立脚した生態系の保全と再生のための新しい方法論の構築に関して議論を行う。本研究会では、基礎生態学と、実践的な保全・再生活動をつなぐインターフェースとして、「生態系デザイン方法論」ともよぶべき新たな知的プラットフォームを形成することを追求する。

公募実習

【底生動物の分類生態実習】

開催予定日：2002年 7月27日～8月 1日
 開催予定地：信州大学山地水環境教育研究センター
 問い合わせ先：成田哲也（生態学研究センター）
 目的：湖沼の栄養状態は、プランクトンだけでなく、底生動物の多様性にも大きく影響している。底生動物は、プランクトンにくらべて生活環の長いものが多く、長い期間にわたる環境変化を表わすのに適した指標生物である。しかし、日本の湖沼での底生動物に関する生態学的・環境科学的な研究はあまり進んでいない。その理由の1つは、優占する分類群である水生ミミズ類やユスリカ類幼虫の分類が困難なことである。この実習では、水生ミミズ類とユスリカ類の分類および生態に関する入門的な実習を行い、生態学的研究を行うために必要な基礎的な技術や知識の習得を目的とする。
 内容：前半はユスリカ類幼虫の、後半は水生ミミズ類の分類および生態の実習。おもに、採集法、標本作製法、同定の方法について実習を行う。
 公募は、6月25日に終了しました。

【河川生態系の環境構造と生物群集に関する基礎実習】

開催予定日：2002年 8月 6日～13日
 開催予定地：京都大学理学部木曾生物学研究所
 問い合わせ先：遊磨正秀（生態学研究センター）
 目的：身近な水環境である河川生態系において、その環境構造と生物群集について、体験を通じて理解してもらう。特に、生物の分布に及ぼす環境構造の影響、食う食われる関係を通じて形成される生物間相互作用など、生態学的な自然の見方を身につけてもらう。
 内容：前半は、講義や基礎的な河川調査法の習得および生物の分類を通じて、河川生態系の構造と研究手法を学ぶ。後半は、受講者各自、あるいは小人数のグループで、自由に研究テーマを定めて実践してもらう。なお、主に藻類、底生動物（水生昆虫）、魚類などを対象とするが、研究テーマは必ずしも河川内にはこだわ

らず、周囲の動植物に関するものも可とする。最終日には、研究テーマの結果発表とそれに関する論議を行う。公募は、7月19日に終了しました。

生態研セミナー

場所：生態学研究センター第二講義室
 問い合わせ先：山内 淳（生態学研究センター）

第143回 9月20日（金）
 「生物多様性や自然生態系機能の経済的評価」
 "Economic evaluation on biodiversity and natural ecosystem"
 長谷川 弘（広島修道大学人間環境学部教授）
 Hiroshi Hasegawa (Faculty of Human Environmental Studies, Hiroshima Shudo University)

「琵琶湖百年誌」
 "A hundred years history of Lake Biwa"
 山村則男（生態学研究センター教授）
 Norio Yamamura (Center for Ecological Research, Kyoto University)

第144回 10月18日（金）
 「土壌微生物多様性の維持機構としての鉱物内部細菌」
 "Role of silicified bacteria within minerals in the maintenance of soil bacterial diversity"
 服部 勉（東北大学名誉教授）
 Tsutomu Hattori (Emeritus Professor, Tohoku University)

「ガスの放出から見たメタン生成微生物共生系」
 "Methane producing microbial system inferred from gas metabolism"
 杉本敦子（生態学研究センター助教授）
 Atsuko Sugimoto (Center for Ecological Research, Kyoto University)

屋久島フィールドワーク講座

開催予定日：2002年 8月19日～26日
 開催予定地：屋久島世界遺産地域(主として西部海岸域)
 問い合わせ先：上屋久町役場環境政策課(電話：09974-2-0100)
 内容：世界遺産登録地である屋久島の自然をフィールドに、これまで現地調査を行ってきた研究者を講師にして、フィールド・ワークの基礎を体験するコースを年一回開催する。地球環境の危機が叫ばれる今日、上屋久町では自然生態系の保全、生物多様性の維持、環境教育の実践を施策として掲げ、具体的な取り組みを展開している。この講座もその中の取り組みの一つである。
 公募は、6月 1日に終了しました。

シンポジウム

問い合わせ先：e-mail：nagata@ecology.kyoto-u.ac.jp

【DIVER/DIWPA 生物多様性国際シンポジウム】

"New Frontiers in Biodiversity Science - From Microbes to Landscape -"

開催予定日：平成14年11月14日～15日

会場：京大会館（京都市）

趣旨：One of the fundamental questions in biodiversity science is regarding the role of community structure in explaining functions and stability of ecosystems. Research has advanced in recent years from its emphasis on species richness to the complexity of ecological interactions*. However, a unifying basis has yet to be developed for conceptualization of structure-function relationships across diverse systems. The goal of this symposium is to exchange emerging ideas on key interactions within and between ecological systems, covering from microbial to landscape scales, with an emphasis on their pervasive role in maintaining major functions of Earth's ecosystems.

*Report of the MEXT/JSPS Creative Basic Research 09NP1501 " An integrated study on biodiversity conservation under global change and bioinventory management system - DIVER- " (Edited by H. Kawanabe, M. J. Toda, and T. Nagata) March 2002. This symposium is organized to synthesize and further develop the concepts obtained by the DIVER project.

【第17回「大学と科学」公開シンポジウム】

「生物多様性の世界 - 人と自然の共生というパラダイムを目指して」

開催予定日：平成14年12月7日～8日

会場：イムズホール（福岡市）

趣旨：人口増加や土地利用改変などによる、地球レベルでの環境劣化のため、生物種がかつてない速度で絶滅しています。このような、「生物多様性の危機」を踏まえて、1992年に開催された国連会議において、「地球温暖化」となるが重要問題として、「生物多様性条約」が調印されました。このような状況の中で、大学が発信源となっていく、生物多様性の創生・維持機構およびその生態系機能、また、生物多様性と人類社会の相互作用の研究は、人類にとって緊急かつ最大の研究課題の一つであります。本シンポジウムでは、このような問題に関する最新の知見を紹介し、今後の展望を俯瞰したいと思っております。

本シンポジウムの中核となる成果は、平成9-13年度に行われた「地球環境攪乱下における生物多様性の保全および生命情報の維持管理に関する総合的基礎研究」（日本学術振興会 学術創成研究）に基づいています。そこでは、熱帯林などにおける長期的生物多様

性観測網の確立や、森と川の生物多様性相互作用の実態把握など、時空間スケールの大きい生態学的研究で、際だった成果をあげてきました。また手法的には、分子生物学から生態学まで多様な研究手法を駆使し、異なる研究法と視点の統合により、新たな生物多様性のたたずまいが明らかになりました。またそれによって、生物多様性科学の創成が可能となりました。

本シンポジウムでは、上記の成果を中心に、4つのセッションにわけて紹介したいと思います。まず、「時間と空間をこえた生物多様性のひろがり」を、多彩なカラー写真を交えて見ていただきます。そして次に、「生物の多様性が支える生態系の仕組み」のセッションでは、自然界のからくりについての意外な発見が、また「相互作用がうみだす生物の多様なたたずまい」のセッションでは、これまでになかった新しい生物間相互作用の描像が紹介されます。それらに基づき、「どうしたら守れる生物多様性」について考えてみたいと思っております。最後の総合討論では参加者との活発な意見交換の場を用意しています。

公募研究会の報告

第12回バイオリージョンGIS研究会

GIS (地理情報システム) による分布様式、行動様式の解析

田中和博 (京都府立大学大学院農学研究科)

京大生態学研究センターの2002年度の公募研究会として、標記の研究会が、地理情報システム (GIS) 学会バイオリージョン分科会の主催により、2002年 6月26日 (水) の13時から17時まで、キャンパスプラザ京都 (京都市下京区) で開催された。北海道や沖縄をはじめ遠方からの参加者もあり、出席者総数は106名を数えた。

GIS学会バイオリージョン分科会は、GISを利用して、地域生命圏を解析するとともに、地域生態系と生活環境との調和を目指した生活空間利用計画等について研究をしている会である。

GISを用いた地域生態系の解析について研究の流れを見てみると、従来は、植生分布と地形要因等との関係を解析したものや、植生図や地形図等の既存の情報を用いて地域生態系の潜在的な機能量を推定した地図、いわゆるポテンシャルマップを作成した研究が多かった。このようにして作成された地図は、どちらかという状態を表す「静的」な解析結果であった。しかし、最近、各種の環境モニタリングに基づく時系列的なデータを解析した研究が多くなってきた。すなわち、時間的な要素を取り入れた「動的」な解析が多くなってきた。

今回の研究会では、こうした流れを受けて、それぞれの立場から、分布様式、行動様式等の変化をGISで解析した例を報告していただいた。以下に、その概要を報告する。なお、司会は吉田剛司氏 (自然環境研究センター) が務めた。

13:10 ~ 13:45 佐藤 明氏・野堀嘉裕氏 (山形大学)・齊藤正一氏 (山形県森林研究研修センター) 「山形県におけるナラ類集団枯損の地理的特徴」 1980年以降、本州日本海側を中心に生じているミズナラやコナラなどの集団的枯損の拡大現象をGISのバッファリング機能などを用いて解析した。ナラ枯れ被害は前年の被害地から500mの範囲以内で経年的に拡大していくこと、被害発生量が北東斜面に多いことなどがわかった。

13:45 ~ 14:20 渡辺伸一氏・中西 希氏・伊澤雅子氏 (琉球大学)・阪口法明氏 (環境省)・土肥昭夫氏 (九州大学) 「島嶼生態系におけるネコ科個体群の時空間的環境利用様式」 イリオモテヤマネコの個体追跡調査結果から採餌などに関する行動様式の解析を行い、また、餌資源量の地理的、季節的变化について解析した。餌動物の生息密度は生息地の植生環境に強く影響されること、ヤマネコの環境選択性は餌資源に強く影響を受けることなどが報告された。

14:20 ~ 14:55 三谷雅純氏・坂田宏志氏 (姫路工業大学 / 兵庫県立人と自然の博物館)・三橋弘宗氏・横山真

弓氏 (兵庫県立人と自然の博物館)・魚谷未夏氏 (奈良教育大学)・朝日 稔氏 (元兵庫医科大学) 「異常出没したツキノワグマの移動地選択 - 2000年に六甲山周辺で目撃された個体の行動圏予測 - 」 市民等から寄せられたツキノワグマの異常出没に関する情報に基づき、兵庫県および大阪府の鳥獣担当部局でとりまとめられた73個所の目撃情報をGISデータとして登録し、バッファ解析、オーバーレイ解析、ロジスティック回帰分析などを用いて、クマの移動地選択性に関する予測を行った。

15:05 ~ 15:40 近藤洋史氏 (森林総研九州)・池田浩一氏 (福岡県森林林業技術センター)・小泉 透氏 (森林総研九州)・今田盛生氏・吉田茂二郎氏 (九州大学) 「福岡県東部地域におけるニホンジカ生息密度分布の解析」 離散的なサンプルデータから等値線図を作成するための補間モデルIDW (Inverse Distance Weighted: 逆距離加重法) を使用して、福岡県東部地域におけるニホンジカの生息密度ポテンシャルマップを作成し、シカが集中して生存している区域を解析した。

15:40 ~ 16:15 亀山 哲氏・王 勤学氏・林 誠二氏・趙 文径氏 (国立環境研究所)・加藤貴雄氏 (パスコ総合技術センター) 「中国長江・黄河流域における水資源分布と現状分析を目的としたモニタリングシステム - GIS・衛星画像解析・シミュレーションモデルの融合を目指して - 」 マクロスケールの水資源分布の変化とその影響に関する研究の基礎として、現在、中国で進められている統合環境モニタリング (IME: Integrated Environmental Monitoring) を紹介したとともに、人工衛星画像 (TERRA/MODIS) 解析の利用、現地調査・観測体制、水収支モデルの開発と応用について現状を報告した。

総合討論の後、次回開催機関を代表して、原 慶太郎氏 (東京情報大学) が、2002年12月頃に、「リモートセンシングによる環境解析の新しい展開 (仮題) - IKONOSによるファインスケールとMODISによるブロードスケールの環境解析 - 」というテーマで開催を予定していることなどを紹介し、閉会の挨拶とした。

なお、当日の配付資料等は、分科会のホームページ: <http://af2.kpu.ac.jp/BioGIS.html> に掲載してある。

[問い合わせ先]

地理情報システム学会 バイオリージョン分科会
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
京都府立大学大学院農学研究科森林計画学研究室内
TEL&FAX : 075-703-5629
E-mail : tanakazu@kpu.ac.jp

2002 - 2003年度京大生態学研究センター協力研究員 (Guest Scientist) リスト

(2002年 5月13日現在、任期は2004年 3月31日まで、五十音順)

氏名	所属	研究課題
阿部健一	国立民族学博物館地域研究企画交流センター	東南アジア熱帯林史
市岡孝朗	名古屋大学大学院生命農学研究科	昆虫類の群集生態学
市野隆雄	信州大学理学部生物科学科	生物間相互作用の進化生態学
伊藤彰英	名古屋大学大学院工学研究科	天然水中微量金属の多元素定量とスペシエーション
犬伏和之	千葉大学園芸学部	農地および自然湿地からのメタン・亜酸化窒素ガス放出
今井一郎	京都大学大学院農学研究科応用生物科学専攻	有害・有毒微細藻類ブルームの発生機構 赤潮の防除
上田恵介	立教大学理学部	鳥類の行動生態学
生方秀紀	北海道教育大学釧路校	トンボ目の保全生物学
大高明史	弘前大学教育学部	水生貧毛類の分類と生態
大竹昭郎		アブラムシ類の個体群生態学
奥田 昇	愛媛大学理学部生物地球圏科学科	海産テンジクダイ科魚類と生殖腺寄生線虫の共進化
越智晴基		タンガニカ湖産魚類の行動生態学的研究
梯 正之	広島大学医学部保健学科	感染症流行の動態と進化
加藤元海	総合地球環境学研究所	湖沼生態系とその管理法
金子信博	横浜国立大学大学院環境情報研究院	土壌生態系における種多様性と機能の関係
亀田佳代子	滋賀県立琵琶湖博物館	生態系における鳥類の役割に関する研究
川幡佳一	金沢大学教育学部	浮遊動物(特にカイアシ類)の生態
菊沢喜八郎	京都大学大学院農学研究科	森林生態学
日下部有信	大谷大学名誉教授	淡水産藻類の生態学
國井秀伸	島根大学汽水域研究センター	汽水域に生育する水生植物の保全生態学的研究
神松幸弘	総合地球環境学研究所	ため池の分布と生物相の関係
小藤弘美	九州自然環境研究所	鳥類の繁殖生理生態学
紺野康夫	帯広畜産大学生態系保護学	平地残存林の保全に関する生態学的研究
坂本一憲	千葉大学園芸学部	植物と微生物との共生関係 植物の生育を促進する微生物の探索とその利用
崎尾 均	埼玉県農林総合研究センター森林支所	溪畔林・河畔林の更新機構の解明と再生・復元手法の確立
櫻井克年	高知大学農学部	土壌生態系の修復
重定南奈子	奈良女子大学理学部情報科学科	生物の侵入と伝播の理論的研究
杉山雅人	京都大学総合人間学部	水圏における微量化学成分の分布と動態
鈴木英治	鹿児島大学理学部地球環境科学科	熱帯林の植物生態
鈴木静男	京都大学大学院農学研究科	熱帯山岳キナバル山における植物-植食者間相互作用系の解明
只木良也	(株)プレック研究所生態研究センター	森林生態、とくに遷移と生産生態 里山の管理技術 森林の環境保全機能 その他森林生態雑学
田中 晋	富山大学教育学部	ミジンコ類の分類と生態
陀安一郎	総合地球環境学研究所	安定同位体を用いた生態学
中越信和	広島大学総合科学部	景観生態学的手法による環境計画の立案・評価
長野義春	郡上八幡自然園	生態学の環境教育的研究
中本信忠	信州大学繊維学部	応用陸水生態学
名越 誠	奈良女子大学名誉教授	魚類の生態学的研究
西村 登	金沢大学日本海域研究所	河川における造網型昆虫の生態学的研究
野崎健太郎	椋山女学園大学人間関係学部	陸水環境における人為的攪乱の影響
服部昭尚	滋賀大学教育学部	ウエットランドの景観構造と動物の社会構造
原口 昭	北九州市立大学国際環境工学部	熱帯および亜寒帯の酸性土壌生成メカニズムの解析と植生のリハビリテーション
兵藤不二夫	総合地球環境学研究所	安定同位体をもちいた食物網解析

平田 徹	山梨大学教育人間科学部	群集構造の安定性とその維持機構
松原健司	淑徳大学国際コミュニケーション学部	中央カリマンタンにおける低地林の窒素循環
箕浦幸治	東北大学大学院理学研究科	地球環境の変動と生物の進化
宮坂 仁	総合地球環境学研究所	水系の同位体生態学
森 豊彦	ホンデュラス農牧省持続的地域開発局	中南米の環境保全型地域開発
谷内茂雄	総合地球環境学研究所	数理生態学(生物多様性、流域管理)
吉岡崇仁	総合地球環境学研究所	陸域生態系における物質循環に関する研究
和田英太郎	総合地球環境学研究所	水系の同位体生態学
渡辺 彰	名古屋大学大学院生命農学研究科	土壌圏における炭素・窒素の動態
渡辺 守	筑波大学生物科学系	昆虫類(主として蝶類と蜻蛉目)の生活史戦略

information

国際シンポジウム BIO-LOGGING SCIENCE の開催について

国立極地研究所ではマイクロデータロガー等の小型計測機器を用いて海洋生物研究を進めています。この分野の研究は近年急速に発展しており、多様なセンサーにより、動物の行動、生理、環境等の情報を得ることが可能になってきました。本シンポジウムでは、国内外の研究者による最先端の技術を用いた動物研究の発表を広く募集します。多数の参加をお待ちしています。

日時：2003年3月17日～21日

場所：国立極地研究所 講堂

〒173-8515 東京都板橋区加賀1-9-10

JR 埼京線「板橋」駅より徒歩15分

または、

都営三田線「板橋区役所前」駅より徒歩10分

問い合わせ先：

〒173-8515 東京都板橋区加賀1-9-10

国立極地研究所

BIO-LOGGING SCIENCE シンポジウム事務局

Tel：03-3962-4569 Fax：03-3962-5743

<http://www.isc.nipr.ac.jp/penguin/oogataHP/animal@nipr.ac.jp>

主催：国立極地研究所

..... 編集後記

- ・2002年度～2003年度の協力研究員が決まりました。協力研究員の皆様、ご協力のほどよろしくお願いたします。
- ・センターの周りでは、草刈りも追いつかないほどの勢いで雑草が成長しています。この時期フィールド研究もたけなわだと思いますが、くれぐれも安全にご留意の上、良いデータを取られてください。

(山内 淳)

京都大学

生態学研究センター・ニュースの問い合わせ先

京大大学生態学研究センター・ニュース編集係

〒520-2113 滋賀県大津市上田上平野町字大塚509-3

Tel：(077) 549-8200

Fax：(077) 549-8201

e-mail：cernews@ecology.kyoto-u.ac.jp